



東北大学

ISSN 0385-0756 Vol.34 No.3 2009



東北大学附属図書館報 木這子

BULLETIN OF
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

URL <http://tul.library.tohoku.ac.jp/>

ー木這子（きぼこ）とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子（こけしぼうこ）ー

目 次

○副館長に就任して・・・・・・・・・・・・・1	○「平成21年度 フレッシュ・パーソン・セミナー」 を受講して・・・・・・・・・・・・・23
○夏目漱石 蔵書（和漢書）の記録 ー東北大学附属図書館所蔵「漱石文庫」に見るー・・・・・・・・3	○平成21年度東北大学附属図書館企画展「江戸のサイエンス ーあたたかな科学が生まれた頃ー」開催報告・・・・・・・・24
○東北大学情報データベース・東北大学研究者紹介と 東北大学機関リポジトリ（TOUR）の 相互連携の方法について・・・・・・・・・・・・・8	○附属図書館企画展「江戸のサイエンス ーあたたかな科学が生まれた頃ー」 第1部 楽しみの科学ー科学を楽しんでいた江戸時代ー・・・・・・・・25
○シリーズ 東北大学附属図書館分館等紹介 その3 工学分館へようこそ・・・・・・・・・・・・・14	○会議・・・・・・・・・・・・・29
○ドイツの学術情報流通：German Study Tour 参加報告・17	○人事異動・編集後記・・・・・・・・・・・・・30
○平成21年度大学図書館職員短期研修 参加報告・・・・・・・・21	

副館長に就任して

附属図書館副館長 柳 澤 輝 行



平成21年10月1日付で、倉本義夫教授の後任として附属図書館副館長を拝命しました。野家館長を補佐して附属図書館の運営に当たるのが私の任務です。年度の

途中なので、医学分館長も半年間兼任させていただくこととなりました。平成20年3月31日発行の木這子（Vol.32, No.4, 2008）に『人の

輪こそ図書館機能の3つのL』として、医学分館長就任時の所信をおおいに述べさせていただきました。そのために、少し書きにくいのですが、今回の就任にあたりまして、改めて現状の認識と今後の図書館の方向性をどのように考えているかを述べたいと存じます。

<学習者の支援>

現在図書館に実際にきて利用しているのは主に研究者よりも学習者である学生です。ここ数

年、附属図書館の学習者支援への対応には目覚ましいものがあります。

- 1) シラバス関連図書の常時閲覧：電子化されたシラバスの中の教科書・参考書情報と図書館蔵書検索システムをリンクし、図書館に来ればそれらがいつでも読めるようになっていきます。
- 2) 開館時間の延長：平成 21 年度には本館の開館時間を、平日は 8 時から 22 時、土・日・祝日は 10 時から 22 時まで大幅に延長し（しばらく前までは平日 9 時から 20 時でした。）、有人開館時間は全国立大学で 1 位となっています。
- 3) 学生用図書と電子ブックの整備：本年度より「新規購入、学生 1 人当たり 1 冊」の旗印を掲げて、総長裁量経費の支援を受けて実施しています。学生やサークルに希望図書の新規購入のお手伝いをしてもらいました。紙媒体以外の学習書、専門書、そして資料、いわゆる電子ブックの刊行は増加の一途であり、その充実は目を見張るものがあります。附属図書館では英語及び日本語の電子ブックについても 12,000 点以上も導入して学習者や研究者の要望に応えています。
- 4) 情報教育支援：『東北大学生のための情報探索の基礎知識』の基本編及び英文版を刊行し、新入生及び留学生に配布しています。さらにこれらの電子版も図書館ホームページで無料公開しています。そして、全学教育科目「大学生のための情報検索術」の授業を第 2 セメスターに継続し、情報リテラシー教育の推進に向けた取組みも行っています。
- 5) インターネット環境の整備：持ち込みパソコンのインターネット利用が可能な無線 LAN の整備など、インターネット上の学習

情報の案内機能も整備されました。

今後もさらなる学習者支援と環境の整備に向けて、皆様の御意見を聞き、改善を図っていきたいと考えます。

＜研究者むけの活動＞

- 1) 電子ジャーナル：研究室に居ながら世界の最先端の研究成果をリアルタイムで入手できる電子ジャーナルを利用できるようになってから、研究者の図書館来館数はまさに激減しました。しかしながら、東北大学での電子ジャーナルの契約タイトル数は平成 21 年度に 1 万タイトルを超え、その論文全文利用件数は平成 16 年度 1,151,283 件から 21 年度 2,566,532 件とまさに倍増以上です。まさしくバーチャルな図書館は拡大しているといってもよいのではないのでしょうか。
- 2) データベース：研究論文の調査に不可欠な文献情報データベースについては、平成 20 年度から 18,000 タイトルの学術雑誌を収録するエルゼビア社の世界最大規模の文献データベース Scopus を導入し、従来からの Web of Science（約 10,500 タイトル）とともに利用できるデータベースの種類が平成 21 年度に 80 種類以上となりました。学術情報へのアクセス環境が飛躍的に改善され、研究基盤の充実が図られています。

このような活動の裏には必ずコストがかかっていることを忘れてはならないでしょう。電子ジャーナル、冊子体雑誌、データベースを含めると、およそ 7 億円もの予算が必要となります。出版社も個人読者の減少に伴い、公的機関での価格を上げてきています。この予算をどのように捻出し、負担の分担をどのようにしていくのか？ 大学全体としての意思統一を図っていく

ばかりではなく他大学とも協調し、種々の学会とも連携を深めながら価格高騰にならないように対処してゆかねばならないと存じます。

＜機関リポジトリ＞

「機関リポジトリ」システムは、学術雑誌価格の高騰で必要な研究資料が利用できなかったり、購読者数の減少でせっかく論文を書いても多くの人に読んでもらえなくなったりしている問題を解決しようと欧米で始まった取り組みです。上に述べた、大手出版社の値上げ行為に対するある種の対抗手段にもなりうると考えられます。基本的に半永久的に図書館がデジタル化した研究・教育活動を保存・公開してゆこうというシステムです。Google など一般のネット検索でも探せるようになっていきます。

東北大学でも東北大学機関リポジトリ TOUR: Tohoku University Repository の名称で、研究・教育成果と貴重コレクションの一般公開を基本路線として、学位論文の要旨を中心に極めて多数の情報を発信していて、その量と質は目を見張るものがあります。大学の論文発表の場の『紀要』は電子化してリポジトリに載せれば、より多くの人に読めますし、紙媒体の雑誌に

するより費用もかからなくなります。大学の独自性を広く知ってもらうためにも有力なものと考えます。また、自分は教科書レベルからその上を目指す学習者に向けて書いた日本語の総説や教材を中心にいくつか登録してもらっています。将来につながる質の高い勉学を支援するシステムとして、外部にばかりではなく内に向かって情報発信するシステムとしても利用してもらいたいものです。どうぞ多くの先生方のお手持ちにある資料・情報の TOUR への登録をお願いします。

平成 23 年は東北大学の附属図書館が創立されて 100 周年となる年です。それを記念して、東北大学附属図書館の伝統と活動とをわかりやすく公開する企画が進展しております。理科系の私には専門外の資料が多いのですが、これを利用しやすくする努力の価値と、その仕事の楽しさはわかります。学術文化の継承と発展をはぐむ場としての図書館を充実させるべく、微力を尽くしていきたいと考えておりますので、ご支援とご鞭撻をお願いする次第です。

(やなぎさわ・てるゆき)

夏目漱石 蔵書（和漢書）の記録

－東北大学附属図書館所蔵「漱石文庫」に見る－

茨城大学名誉教授 佐々木 靖 章

「漱石文庫」と付き合い始めて 40 数年がたつ。その間多くの方々の協力をえて、亀の歩みの研究を続けてきた。別置の場所もかわった。修士課程 2 年の昭和 39 年から昭和 40 年にかけて初めて出入りの許可を得た時は、片平丁の書庫の上階。仙台で最も旧式と言われた手動式エレベ

ーターに乗るのが「漱石文庫」に入庫する通過儀礼のように思えた。その後川内の新図書館の地下の一角へ移り、今は 2 号館の上階にある。

仙台を去ってから何よりの助けとなったのは、附属図書館発行の『漱石文庫目録』（1971）である。それを手掛かりに定年後に再調査を始め、

『夏目漱石 蔵書（洋書）の記録—東北大学所蔵「漱石文庫」に見る—』（てんとうふ社、2007）を出し、次いで図版入りの増補改訂版（同社、2008）を出した。しかし、誤記・誤植も多く、再改訂の必要を感じていたところ、和漢書の記録もあった方がいいのではないかとの助言もあり、『新版・夏目漱石 蔵書の記録』の上梓を目指して、和漢書の新たな調査と洋書の再点検を始め、ほぼ終了に近づきデータ整理を始めたところに、本誌から紙面の提供を受けたのを機に和漢書の記録の一端を紹介したい。

『漱石文庫目録』の和漢書の項には、洋書の項にはないデータ（漱石の蔵書印・漱石への献呈署名・漱石以前の所有者の主な蔵書印等）が付記されており、それらの字間からだけでも研究のヒントを発見出来るケースは洋書より多いのではなかろうか。しかし、現状は洋書研究が先行しており、和漢書研究の遅れは否めない。

最初に注意を引いたのは、『1144 古調庵伝記』にある「水野文庫」の朱印（77×17mm、以下 A）で、『1156 諸国翁墳記』には A とは別の「水野文庫」の朱印（47×25mm、以下 B）も見つかった。A と B は和漢書全体で 10 点にあった。『1156 諸国翁墳記』には、更に「熊④本／上通二丁目／書舗／川口屋又次郎」の朱印（37×27mm、以下 C）があった。『1191 高青邱詩諄』には「熊本市上通二丁目／河嶋書店」の朱印（34×17mm、以下 D）が出現した。C と D は全体で 23 点にあった。『1453 南畝莠言』には「河嶋」の円い朱印（10mm、以下 E）を発見。E は『1493 義士肖像賛詞』にもあった。C と D と E は同じ河嶋書店の印章に違いない。そして、同一本に、水野文庫印 A、B のいずれかと河嶋書店印 C、D、E のいずれかが押印されているのが『1156 諸国翁墳記』以下 7 点存在することが分かった。そこで、「水野文庫」のみの押印がある『1144 古調庵伝記』以下の 3 点も河嶋書店で購入したのではないかと推測するにいたった。実例を示すため『1156 諸国翁墳記』（図版 I）、『1453 南畝莠

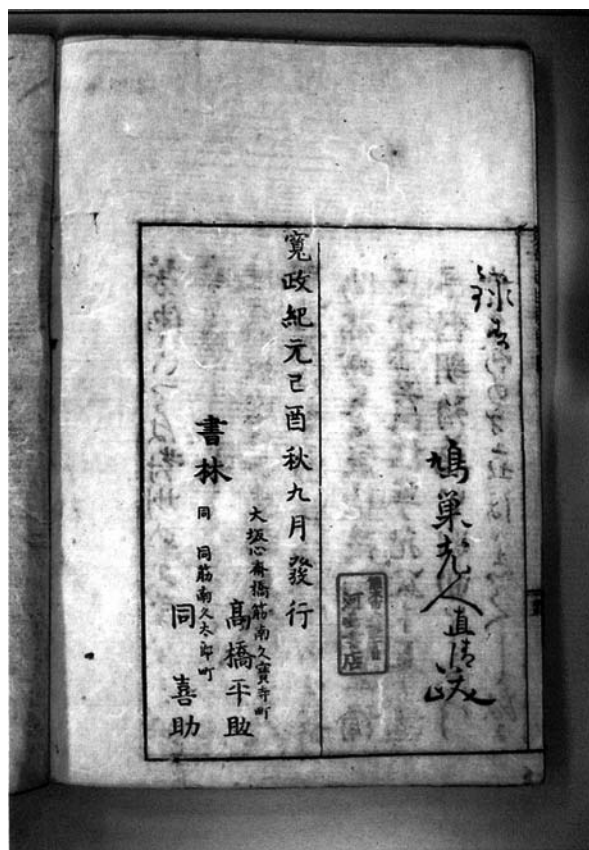
言』（図版 II）、『1455 芳洲先生たはれくさ』（図版 III）、『1493 義士肖像賛詞』（図版 IV、部分）の押印箇所を掲げる。図版 I の B は 2 カ所にある。図版 IV は「河嶋」の字面が読み取れるように、E を原寸大に近い形で載せた。なお、図版 II に見える⊕は今回のテーマと関係のない押印である。



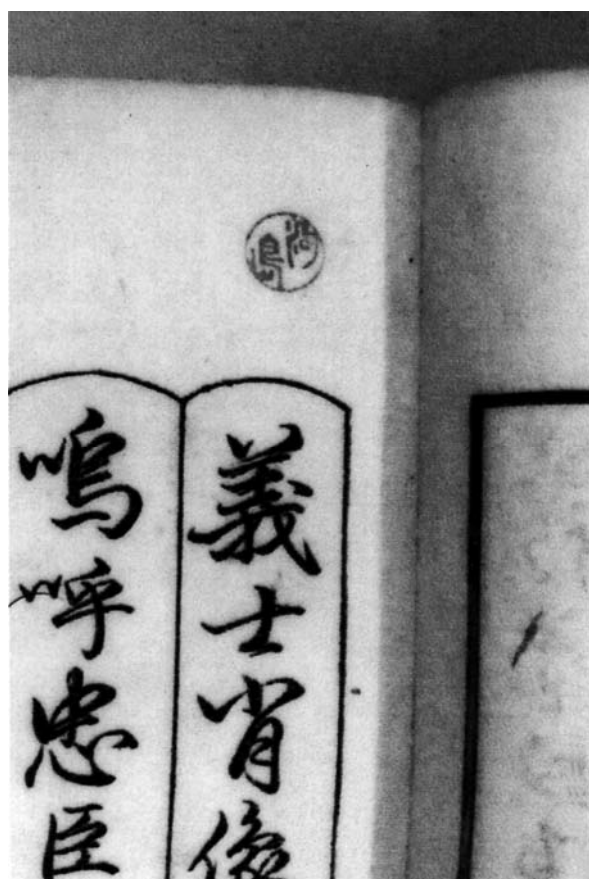
図版 I



図版 II



図版 III



図版 IV

「漱石文庫」に出現した熊本の河島書店とは、
舒文堂河島書店に違いない。筆者は数十年来の
付き合いがあり、かつて、お店を訪ねた時、店
頭に宇野哲人の書額の掲げられていたのが印象
に残る。明治 10 年開店の古書店の老舗で、今も
同じ場所にある。確認する必要があると思い電
話してみると、四代目の河島一夫氏が出られ、

「川口屋」「河嶋書店」の印章は当店のもので現
在も残っております、先代（三代目）の書いた
本に載っております、との返事。さらに、荒正
人著『増補改定 漱石研究年表』（集英社、昭和
59）に漱石との関係が載っていると教示頂いた。
早速、河島昌扶著『還暦記念出版／書肆三代』
（河島書店、昭和 52）を取り寄せて目を通した。

同書には C と D の印章の写真が載っており、
C の㊦は「日の丸を表し日本を愛する気持が出
ているやうだ。」と説明がある。夏目漱石との関
係を書いた部分も散見される。初代又次郎は、
漱石が熊本に赴任後間もない明治 29 年 8 月に病
に臥して 18 歳の豊太郎が二代目を継いだとい
うから、漱石は初代、二代と付き合いだったのであ
る。しかも、五高で漱石と同僚の稼堂黒木植は
初代と親交を結んでおり、「川口屋」に替えて「舒
文堂」の屋号を与えるほど親しかった落合東郭
は、漱石が熊本で 4 番目に住んだ住宅の持ち主
であった。河島書店が取り扱ったのは、和漢書
の古書と和綴じの新刊とに限り、洋本は対象外
とし、初代二代はことに店頭置く本の選択に
は一家言を持ち、C と D の押印のあるのは「珍
書と思ふ本」（当主の河島一夫氏の言に従えば、
今で言う「善本」。E も同種の印章）であった。
漱石と親子二代の古本屋との間には「珍話逸話」
があったろうと言う記述は気になる。

『増補改訂 漱石研究年表』には、明治 29
年 4 月 13 日、漱石が熊本に着いた当日「菅虎雄
宅に来る途中、叙文堂河島書店（古書店 熊本
市上通町二丁目）にも立ち寄る。」（注・一七）
とある。この項は荒正人の没後、関係者により
増補された部分で典拠不明ではあるが、事実と

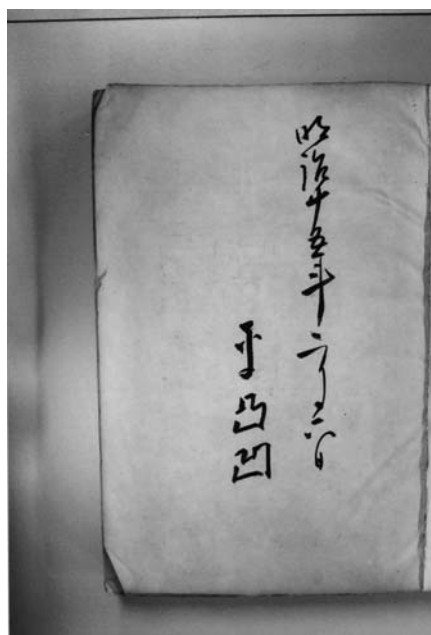
すれば面白い。本好きの漱石が、落ち着き先の菅宅に向かう途次、たまたま目に留まり、人力車を止めて立ち寄ったのだろうか。和漢書一筋に善本を提供する河島親子と漱石との店頭における遣り取りはどのようなものであったろうか。

その後、河島一夫氏は、C～E とは別に「河島文庫」(39×24mm, 以下 F) という朱印があり、その印のある書籍は自家用で、相当量現在も残っておりますと教示され、A・C・F が並んで押印された「肥後国地理略」(写本) のコピーを送ってこられた。肥後熊本の歴史を支える古書店の文化力を知らされるとともに、和漢書との関係においては、漱石にとって熊本はまたとない任地であったのではないか、という思いを深くした。

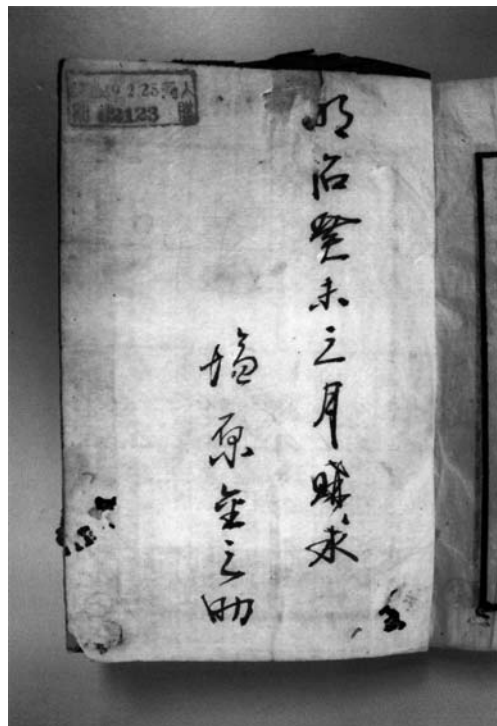
「水野文庫」「河島書店」以外にも筆者を楽しませてくれた記録がある。洋書に劣らず和漢書も賑やかなのである。たとえば、漱石自身の署名の数々。『百家説林』九冊に、明治24年1月から明治25年2月にかけての購入時と併記された署名は「夏目金之助／わけだの漱石子／平凸凹／那津免金之助」などと変化に富んで面白い。

「那津免金之助」の署名は、明治25年12月購入の署名のある『1449 怨軒漫筆』にも使用、明治26年11月購入の署名のある『1423 雨月物語』では「奈津免金之助」と書く。「平凸凹」は『百家説林』で二度試みており、俳号を模しているようにも思われ、その一つの「平」字は人面にも見え、俳画風に描いたようにも思われる(図版 V)。署名以外の記録も含めた『百家説林』に残された記録からは、帝大1年から2年にかけて江戸文学に親しんだ様子が窺われる。「塩原金之助」の署名本が1冊残る。『1468 平仄附韻／訓訳字義 広益正字通』で、「明治癸未三月購求」とあり、明治16年の購入とわかる(図版 VI)。伝記上不明の部分の多い時期で、漢籍に親しみ漢詩作りに励んでいた証拠としても貴重な記録である。使いこなした跡が残る。献呈署名本では、「呈／愚陀仏庵主人 著者」とある正岡子規

著『増補／再版 瀬祭書屋俳話』(日本新聞社, 明治28.9) が光る(図版 VII)。子規が愚陀仏庵で漱石と同居したのは明治28年8月27日から二月足らず、その記念碑的記録である。これら「漱石文庫」全冊の記録の詳細は、来年刊行予定の『新版・夏目漱石 蔵書の記録』を御覧いただきたい。



図版 V



図版 VI



図版 VII

最後に、A～E の押印のある蔵書一覧を掲げる。押印の様態は様々だが、詳記しなかった。漱石自身の蔵書印等の記録や他の様々な記録類も除いた。総冊数は26点118冊に及ぶ。「漱石文庫」に残る和漢書1,400冊余には明治以降刊行の洋装本も含み、「国華」等の逐次刊行物や『俳諧叢書』等のシリーズ物も含んでいるので、それら約300冊を引くと和漢書は約1,100冊となり、河島書店購入本の割合は一割を越える。和装の謄本等約100冊を引くと約1,000冊となり、比率は更に上がる。熊本在住時、漱石が河島書店に頻繁に出入りし、和漢書を次々と買いこんでいる姿が彷彿される。これまでの漱石研究では、熊本時代の書籍購入については、洋書への意欲を評価し過ぎた嫌いがある。その修正が必要であろう。

なお、「1455 芳洲先生たはれくさ」には、漱石の蔵書印のほかに「菅蔵」の朱印もある。これが菅虎雄の蔵書印であったとすれば、菅が先

に河島書店から入手し、その後漱石に譲ったことになる。

2009年7月に「朝日新聞」で報道された、熊本時代に自ら書斎を描いたと思われる「漱石の絵」には、堆く積まれた書籍が見える。和本と洋本との区別は必ずしもつかないが、和本が大半を占めているように見える。その推測に立てば、その中には以下の一覧に掲げる書籍が首座を占めているのではなかろうか。

(ささき・やすあき)

- *1144 古調庵伝記⇒A
- *1156 諸国翁墳記⇒A, B, C〔図版 I〕
- *1166 俳諧袖珍鈔 6冊⇒A
- *1191 高青邱詩諄 4冊⇒D
- *1195 五雜組 8冊⇒C
- *1207 晉書鈔 3冊⇒C
- *1227 杜詩偶評 3冊⇒C
- *1278 大日本校訂大藏經目錄⇒C
- *1287 宝物集 3冊⇒C
- *1298 宏智禪師頌古 2冊⇒C
- *1324 補刻 括印補正並補遺 6冊⇒A, C
- *1374 茶人花押藪⇒A, B, C
- *1402 盆砂絵本三拾六景⇒A, C
- *1429 消息文例 2冊⇒C
- *1434 人麻呂集⇒C
- *1435 百人一首一夕話 9冊⇒C
- *1437 萬葉集略解 32冊⇒C
- *1448 駿台雑話 5冊⇒C
- *1450 諸国里人談 2冊⇒C
- *1453 南畝莠言 2冊⇒A, C, E〔図版 II〕
- *1455 芳洲先生たはれくさ 3冊⇒D〔図版 III〕
- *1475 字彙 7冊⇒C
- *1493 義士肖像賛詞⇒A, C, E〔図版 IV, E の原寸大〕
- *1495 京之水 2冊⇒C
- *1503 西山遺事 2冊⇒A
- *1552 増補地錦抄 10冊⇒A, C

東北大学情報データベース・東北大学研究者紹介と 東北大学機関リポジトリ（TOUR）の相互連携の方法について

東北大学評価分析室 元木 正和^(○)、曾根 秀昭^(☆)
東北大学附属図書館 加藤 信哉^(★)、菅原 透^(□)

1. 概要

Web上で研究者が教育・研究成果をアピールできる研究者紹介ページや、大学として学術成果や教育資料などを収集し公開する機関リポジトリについては、すでに多くの大学で導入されている。ここでは、この2つのシステムを連携し、それぞれのシステムの長所をさらに伸ばすために、東北大学で検討し、その結果導入した連携方法について説明する。

2. 経緯

機関リポジトリより一足早く、評価分析室所掌において、東北大学情報データベース（以下、東北大DB）[図1]は大学内の教員の業績等のデータを一元的に集約し活用するため、2004年の12月に開発を完了し、運用を開始した。教員によって東北大DBに登録された業績等のデータを元に、1日に1回バッチ処理により公開専用のデータを作成し、これを学外一般に公開する東北大学研究者紹介（以下、研究者紹介）[図2]も同時にリニューアルし、この運用を開始した。



図 1 東北大 DB の画面例

一般教員ユーザーからの東北大DBへの要望として、論文題目などの情報だけでなく、論文等のpdfファイルなどの実体をサーバーに置けないかという希望はたびたび教員サイドから出ていたが、運用開始後ちょうどよいタイミングで図書館側からも東北大学機関リポジトリ（以下、TOUR）[図3]と東北大DBを連携させ、お互

いにメリットが生じるような運用が可能か検討していただきたいという依頼があった。また、この連携については、教育・研究・社会貢献などを柱に、東北大学として取り組むべき重点的課題である井上プラン（東北大学アクションプラン）[1]に盛り込まれることとなった。

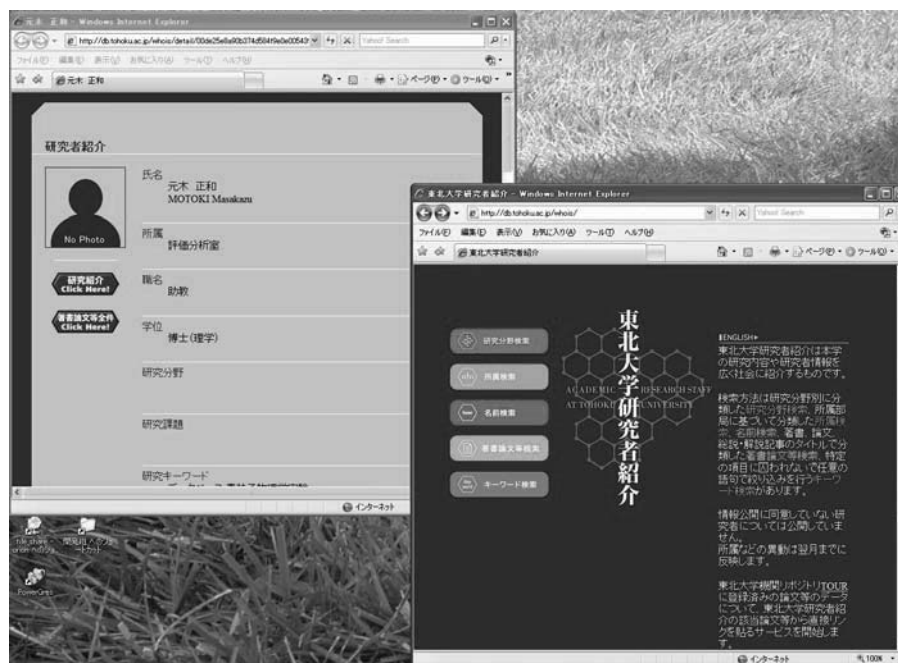


図 2 研究者紹介の画面例

そこで2007年3月に、評価分析室と図書館で東北大DBとTOURの連携にあたり、まず、お互いの意見交換を行うこととなった。

図書館側からは、TOURは立ち上げたばかりで、論文等のデータはほとんど未登録であること、ソフトとしては、フリーソフトであるD-Spaceを用いてカスタマイズしていること、などの説明があった。

また、評価分析室側からは、東北大DBには、当時すでに10万件以上の論文データの登録があり、すでに他大学に対してかなりのアドバンテージがあることなどを説明した。

最初の結論としては、今後もお互い継続して検討しましょう、というものであったが、ここから2年以上にわたる運用改修検討が始まった。

この後、何回もの打合せを重ね、TOURの運用について、図書館での必要な作業についての確認や、東北大DBとTOURの連携方法が確定するまでの暫定的・試験的な運用方法についての検討を行った。



図 3 TOUR 画面

3. 連携方法の検討

この間、並行して、リポジトリへのデータ登録において、先進的な取り組みをしている他大学の状況調査を実施した。〔2〕、〔3〕

教員からの登録申請によってリポジトリへデータ登録している大学では、その申請率の低さが問題となっていた。これは、著作権の問題がからみ、一旦、教員のリポジトリ登録の許可を確認する必要があること、さらに、図書館側で、最終版原稿をリポジトリへ登録してよいかどうかの確認、だめならどの段階の原稿を載せてよいかの確認などの作業が必要で、人による確認作業が必須であることが足かせとなっているようであった。

これを踏まえて、教員の作業を最小限にし、かつ、東北大DBやTOURの運用の効率をいかに上げるか、という点が重要であるということが次第に明確となってきた。

対処方法としては、教員からの登録申請の代わりにリポジトリへ登録するデータの元となりうる情報をなんらかの手段で得て、これを元にリポジトリへデータを登録する必要があると考えられた。

幸い、東北大DBには、当時すでに10万件を超え20万件にせまる数の論文データが登録されており、データ登録率はかなり高いと考えられた。TOURの運用の効率を上げるために、これを元にメタデータ及び論文のpdfファイルを登録すれば効率的である旨を提案し、図書館と評価分析室において、この方針で検討するべしとの同意を得、まず試験的に、TOURへ論文を登録する作業を開始した。

作業としては、評価分析室担当者において東北大DBから論文データを抽出し、そのテキストファイルを図

書館担当者へ送付、後、図書館担当者で登録するデータ（出版社等が登録を許諾しており、著作権的に登録しやすいもの）を選別し、そのデータについて教員へ登録可否の確認を行い、登録可能なデータを機関リポジトリへ登録した。

この方法であれば、教員としては、許可するかどうかだけの判断でよく、教員作業としては、実質最小限のものとなる。また、図書館担当者としては、あらかじめ著作権的に登録しやすいデータだけであるので、教員から許可が得られれば、このデータをすぐにTOURへ登録できるため、この作業も効率化できる。

まず、1年ほどこの運用を実施し、まずTOURへの論文データ登録に関連する問題点を洗い出した後に、この方法を発展させる形で、東北大DBの該当する論文に対応するTOURの一意なURLを登録するような運用を検討した。

4. 東北大DB、TOURの連携運用方法、及びその要件定義

この連携で実現すべきことは、以下の点である。

I) TOURへの登録作業における教員へのメリット

I - i) TOURに登録する論文等を増やすためには、論文等のpdfデータをTOURへ登録する際、教員の作業負担を最小限とすること

I - ii) 研究者紹介において公表される論文に対して、該当するTOURのURLの情報を付加し、一般ユーザーが1~2クリックで論文等のpdfファイルを閲覧できるとし、TOURへのデータ登録されたことによるメリットを教員が享受できること

II) TOUR登録作業の効率化による作業担当者のメリット

II - i) TOUR登録担当者が直接東北大DB上の論文等のデータをダウンロードし、また、TOURで決定された論文pdfファイルへのURLを東北大DBの該当する論文データの追加項目へ直接登録できること。作業担当者があらかじめ著作権的に登録しやすいものなど、作業レベルをそろえたデータを抽出可能とし、これらのデータについてまとめて教員に確認することで、作業効率を上げられること。

機関リポジトリへの文献登録作業において、教員によるデータ登録依頼、及び、図書館の人手による著作権の確認作業は必須である。結局のところこれらの作業がボトルネックとなっていると考えられるため、この作業をスムーズにできるように最終的な運用が検討された。

これまでの試験的運用を踏まえ、以下の手順で運用することとした。

- ① **【教員の作業】** 教員が、論文等のタイトルなどのメタデータを東北大DBへ登録する。
- ② 図書館の担当者が、東北大DBに登録された論文等のメタデータを元に、出版社等から機関リポジトリへの登録が許諾されている論文pdfファイルについて登録の可否を各教員へ問い合わせる。
- ③ **【教員の作業】** 教員が、TOURへの論文pdfファイルの登録可否の回答を図書館へ連絡する。
- ④ 図書館の担当者が、登録可の論文pdfファイル及びメタデータをTOURへ登録し、そこで決まったリポジトリのURLを東北大DBの該当する論文等のデータ項目へ追記して登録する。
- ⑤ 自動的に東北大DBのデータを元に研究者紹介が作成され、TOURの該当する論文等へリンクが作成される。

教員の作業としては、東北大DBへ自分の実績として論文タイトルなどのデータを登録すれば、後は特に自ら積極的に作業することなくTOURへの論文pdfデータ及びメタデータの登録が完了し、研究者紹介において、該当するデータへリンクが貼られる。[図4]

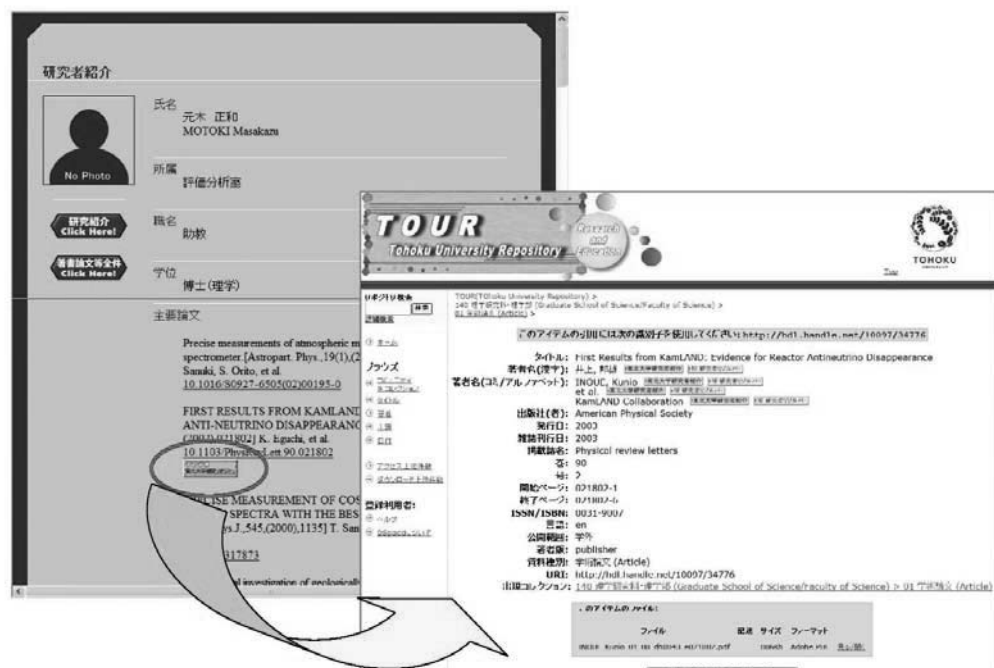


図 4 研究者紹介から TOUR へのリンク

主な改修箇所は、東北大DBにおいては、論文データテーブルへのリポジトリURL項目の追加、条件抽出による論文データのダウンロード機能、及び、リポジトリURL登録のためのデータファイルアップロード機能の追加、研究者紹介におけるリポジトリURLへのリンクの追加であった。TOURにおいては、東北大DBでの論文識別番号を保持するための項目追加等であった。

これらの東北大DB・研究者紹介及びTOURへのシステム改修は2009年6月に全て完了し、その後、連携運用が開始された。

5. まとめ

2009年6月末のシステムリリース後、現在まですでに約1,000件の論文について研究者紹介からTOURの該当ページへリンクが貼られており、今後登録データを増やしていく予定である。機関リポジトリへのデータ登録については、全国の大学・研究機関においてさまざまな取り組みがなされている。大学・研究機関の状況によって選択すべき方法は様々であるが、東北大学の方法は、すでに稼動しているデータ入力率の高い東北大DBを元にして論文等のpdfファイルなどのデータをTOURへ登録する方法であり、すでに研究者紹介に類する

ホームページが稼動している大学・研究機関については、同様の方法をとることは多大なメリットがあると考えられる。

謝辞

東北大DB、TOUR連携にあたり、野家図書館長、倉本前副図書館長、岡田評価分析室長に感謝いたします。検討及びそれに続く開発期間は2年以上にわたり、この間の図書館、評価分析室、SRA東北の多くの関係者の現場の意見によってこの連携が可能となりました。関係者の皆様に感謝いたします。

(もとき・まさかず、そね・ひであき、かとう・しんや、すがわら・とおる)

(○) 東北大学評価分析室助教 問い合わせ先 E-mail: motoki@hbs.tohoku.ac.jp

(☆) 東北大学評価分析室副室長、東北大学サイバーサイエンスセンター教授

(★) 東北大学附属図書館総務課長

(□) 東北大学附属図書館総務課情報企画係長

参考文献

東北大学研究者紹介

<http://db.tohoku.ac.jp/whois/>

東北大学機関リポジトリ TOUR (TOhoku University Repository)

<http://ir.library.tohoku.ac.jp/>

[1] 井上プラン (東北大学アクションプラン)

<http://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/president/01/president0101/>

[2] 九州大学学術情報リポジトリQIRと研究者情報の連携

小野真由美 他

九州大学附属図書館研究開発室年報(2007)

<http://hdl.handle.net/2324/8085>

[3] 金沢大学学術情報リポジトリKURAの構築と課題

橋洋平

大学図書館研究 79, pp. 18-26

<http://hdl.handle.net/2297/6593>

工学分館へようこそ

工学分館 整理・運用係

1. はじめにー工学分館概要

シリーズ第3回目は、青葉山東キャンパスの工学分館を紹介します。



工学分館外観

東北大学附属図書館工学分館は、昭和42年(1967)に設置された工学部中央図書室に端を発します。当時、既に各学科にも図書室がありました。工学分館の現在の旧館部分にあたる建物は昭和55年(1980)に建てられたもので、平成7年には新館部分が増築されました。この増築と並行して、殆どの学科図書室は廃止され、分散していた図書と雑誌が工学分館に集められました。

蔵書については、その歴史は工学部創設(1919)よりもさらに時代を遡り、仙台高等工業学校や工学専門部時代からのものを引き継いでいます。もちろん、科学技術分野を中心に最新の資料を取り揃えていることは言うまでもありません。また、工学部創設以来の博士論文約7,600本を所蔵していることも大きな特徴といえるでしょう。

2. エントランス～1階フロア

1階部分から各フロアを順に案内しましょう。

入ってすぐのエントランスホールには、新聞コーナーと雑誌のブラウジングコーナーがあります。ここにある雑誌は「週刊朝日」「AERA」「ダ・ヴィンチ」など、勉強の合間の休憩用として用意しているもので、利用者の人気投票により購入タイトルを選定しました。周囲にはソファが並べられ、飲食も出来るため、コーヒーを片手にリラックスした時間を過ごされる方が多いようです。「S-style」や「じゃらん」などのお出かけ情報誌も人気があり、学業に専念しつつも、楽しい余暇の計画に余念がない学生生活が垣間見えるようです。英字新聞や英語学習用の雑誌もこちらで読むことが出来るため、留学生の方や語学の勉強に興味がある方にもお勧めのスポットです。



自販機もあります！ブラウジングコーナー

最近の試みとしては、新たに「ぶち展示」コーナーを設け、研究室紹介をパネル展示と動画の上映で行っています。通りすがりに足を止めて、普段なかなか目にすることのない他研究室

の研究内容を新鮮な気持ちで見てくださる方が多いようです。

さらに奥へ進み、自動ドアをくぐると、カウンターとパソコンコーナーがあります。パソコンのデータを直接印刷出来る、コイン式のコピー機兼プリンターを設置してからは利用者が格段に増えました。最新の OS Windows7 を導入したパソコンもあり、おおいに利用されていることは喜ばしいのですが、古い型に馴れている職員としては、たまに操作方法を聞かれるとどきまぎします。



「ぷち展示」コーナー

このエントランスからカウンター前にかけてのエリアでは、七夕やハロウィン、クリスマスなど季節に合わせて、職員が飾り付けをしています。この取り組みに対する思い入れは年々加熱する傾向にあり、先だっつのクリスマスには、利用者の皆さまに勉強の合間に飾りを眺めて疲れを癒して欲しい、楽しい気分になって欲しいと願うあまり、ドアや看板、柱にいたるまで飾り立てたのは記憶に新しいことです。「飾り付け、素敵ですね！」と感激の声をかけて下さる方もいて、職員の気持ちは決して一方通行ではありません。

学術雑誌の新着コーナーを左手に眺めつつ新館方向へ進むと、学科旧蔵図書のコーナーに出ます。通称「積層（せきそう）」と呼ばれるこのフロアは1階と中2階に分かれ、かつての工学

部の各学科図書室にあった資料が並んでいます。前述の仙台高等工業学校や工学専門部時代の資料は主にここに含まれています。今日では入手困難なものも多く、書物が今よりずっと貴重だった時代のものなのでしょう、中にはハッとするほど装丁が美しいものもあります。



お約束のクリスマスツリー



案内板もキラキラになりました



学科旧蔵図書コーナー

3. 2 階フロア

旧館の2階は、洋雑誌のフロアになります。主に英語の雑誌がタイトルのアルファベット順に並んでいますが、壁際などにロシア語や韓国語などの珍しい雑誌もあります。その他、JISなどの規格資料も揃っています。

2階旧館と新館の間には、増築時にどうしても解消できなかったと思われる謎の段差という敷居のようなものがあります。元々はベランダに出るための窓だったと思われます。無論、正当なルート（東側の通路。2009年12月現在は工事により閉鎖中）をたどれば段差の無い移動も可能ですが、職員も含めて「よいしょ」とそこを跨いで近道する方が多数です。

ふしぎな敷居を跨いだ先の新館2階は、単行書が並ぶフロアとなります。2009年度は新刊本の選定に力を入れ、教員や学生の方々にもご協力いただき、4,000冊以上の図書を新たに購入することが出来ました。



新館2階単行書コーナー

4. 3 階フロア

3階は和雑誌が並んでいます。和雑誌なので、あいうえお順に並んでいると思う方が多いため、3階を案内する際は必ず「アルファベット順に並んでいます」と付け加えるようにしています。

ここでは、閲覧席の照明も人の動きを察知するセンサーで稼動しています。ですので、身動きもせず読書に集中している方の上の照明がす

っかり暗くなってしまうことが多々あります。集中しすぎて、照明が消えたことに気づかないのでしょうか、あるいは不便をひたすら我慢しているのかもしれませんが。そんな時は非常に申し訳ない気持ちになり、集中している時に声をかけられるのはかえって迷惑なことかもしれませんが、歩み寄ってセンサー稼動であることを説明するようにしています。

5. おわりに

以上、工学分館内部のご案内でした。雰囲気もうまく伝わったでしょうか？

最後になりましたが、工学分館では論文や資料の探索方法、レポートの書き方などについての講習会も積極的に開催しています。こちらに興味のある方も是非ご参加ください。

職員一同、お待ちしております。

〈連絡先〉

◆住所

〒980-8579 仙台市青葉区荒巻字青葉 6-6-03

◆電話 Tel. 022-795-4021 (カウンター)

◆ホームページ

<http://www.library.tohoku.ac.jp/eng/>

ドイツの学術情報流通 : German Study Tour 参加報告

情報管理課図書情報係 渡 邊 愛 子

平成 21 年 11 月 22 日から 11 月 29 日まで、ドイツ文化センターの公募によるドイツ図書館への研修旅行に参加することができた。この研修旅行では、ドイツの図書館の電子化と最新の学術情報流通の事情を見聞すること、人的交流を図ることを目的に、ドイツ国立図書館フランクフルト、ニーダーザクセン州立=大学図書館ゲッチンゲン、技術情報図書館、バイエルン州立図書館、マックス・プランク・デジタル図書館を訪問した。日本からは国立情報学研究所、科学技術振興機構、国立研究所、国立大学の図書館員 12 名が参加した。

機関リポジトリ（以下 IR）、オープンアクセス（以下 OA）、電子情報の長期保存などに関するプロジェクトについて、日本側の発表を加えて、5 日間で 50 を超えるセッションを持った。すべてを紹介することはできないので、各館を特徴付けるプロジェクトを紹介する。

なお、各図書館の日本語名称は『ドイツにおける学術情報流通』1) の訳語によっている。

ドイツ国立図書館（フランクフルト・アム・マイン）

ドイツには長らく国立図書館がなかったが、1912 年に設立されたドイツ語資料を網羅的に収集することを目的に設立されたドイチェ・ビューヘライ（ライプツィヒ）、1956 年から活動をしているドイチェ・ビブリオテーク（フランクフルト・アム・マイン）、1974 年設立のドイツ音楽資料館（ベルリン）が 2001 年に合同し、2006 年にドイツ国立図書館となった。

ドイツ国立図書館では、デジタル資料の長期保存のためのプロジェクト KoPAL、電子化の諸問題を解決し knowledge network search を目指すプロジェクト CONTENTUS、自然科学分野におけるデジタル情報の永続的利用に関する意識調査

PARSE Insight、EU の電子図書館プロジェクト EUROPEANA に対応する DDB (German Digital Library) の取り組みなどを伺った。

もっとも興味深かったのは CONTENTUS であった。人間であれば当然識別することができる同名他者などの文脈による自動識別や、図書だけでなく、人物の肖像、音楽や映像資料など関連する情報を総合的に検索することを目指す取り組みである。スキャンデータの読み取りムラなどの自動補正、映像情報メタデータの自動生成、そのメタデータ情報を利用した検索など、データ生成から提供までを総合的に研究するものであった。

2006 年の図書館法改正により、冊子体資料の 2 冊の納本義務に加え、電子出版物の納本が義務化された。それにより博士論文は完全に電子納本されているという話題も、日本の博士論文の流通事情と比較して大変興味深かった。

助成機関ドイツ研究振興協会（Deutsche Forschungsgemeinschaft : 以下 DFG）の概要説明もあった。今回の研修旅行で紹介されたプロジェクトのほとんどは、DFG、ドイツ連邦政府、EU の資金を得ており、全ドイツ、全ヨーロッパの複数の図書館が連携した活動である。

ニーダーザクセン州立=大学図書館ゲッチンゲン

仙台を日本の月沈原（ゲッチンゲン）にすることを目指した草創期の先生方が購入した資料を多く所蔵する図書館の一員として、ゲッチンゲンを訪問できることが、今回もっとも嬉しいことであった。1734 年設立というニーダーザクセン州立=大学図書館ゲッチンゲン（以下ゲッチンゲン大学図書館）は、グーテンベルク聖書の電子化などで知られる。しかし今回は、図書館長ロッソウ博士を筆頭に推進されている OA 分野の取り組みを

中心に伺った。

OA 分野のリーディングライブラリの一つであるゲッティンゲン大学図書館でさえ、学内の OA への理解浸透を図るために長い時間をかけてきており、今もその努力を続けているという。研究者への情報提供、インフラとしての OA 公開サイトの整備、出版社との交渉、EU や世界の図書館との連携などからなるゲッティンゲン大学図書館の OA 戦略に沿ってプロジェクトの紹介があった。列举すれば図書の OA への取り組みである **OAPEN**、IR の最低基準を定め質の良い情報を提供することで OA を促進しドイツの研究成果の可視化を図ろうとする **DINI**、全 EU 加盟国で OA をサポートする体制を作る **OpenAIRE**、sword protocol を用いて出版社から OA 記事のデータを直接各 IR へ取り込むプロジェクト **peer**、**DRIVER** などである。**DRIVER** は、OA の基盤形成と情報共有のための組織だが、その国際的發展形として **COAR** がこの 10 月立ち上げられたことが紹介された。**COAR** には日本からデジタルリポジトリ連合と国立情報学研究所が参加している。また Springer 社の Open Choice を大学として契約し、大学の研究成果の OA 化に取り組んでいる Springer Tunnel も話題となった。このプロジェクトで年間 60 記事が IR に掲載されているということだった。

「IR でもっとも重要なことは、研究者自身に登録してもらうことで、私たちは登録のための支援プロジェクトに力を入れている」という OA、IR への取り組みの姿勢が印象的であった。

また、Born Digital な情報が増大している現在、その情報の長期保存について考える **nestor** の紹介があった。80%の研究者が長期保存の取り組みに興味があり必要だと考えているが、実際に対策をとっているのは 12%に過ぎない、という自然科学分野を対象にした調査結果も、今後緊急に取り組まれるべき課題として興味深かった。

技術情報図書館 (ハノーバー)

ドイツには、技術、医学、経済の 3 つの中央専門図書館がある。今回は技術情報図書館 (以下 TIB) を訪問した。TIB は 1959 年の設立だが、1835 年設立のハノーバー大学の図書館も兼ねており、TIB/UB と通称されている。

3 つの中央専門図書館のデータベースポータル **GOPORTIS**、電子ジャーナルのナショナルライセンス、40 以上の主題ポータルの総合検索サイト **VASCODA**、科学技術の総合ポータルを目指す **GetInfo**、高エネルギー物理学分野での OA の試み **SCOAP**³、そして医学中央図書館の OA の試み **GMS** について発表があった。

電子ジャーナルのドイツナショナルライセンス契約は DFG が資金提供を行い 2004 年から実施されている。ドイツ国内 9 つの図書館が分野ごとに出版社との交渉、契約を担当しており、TIB は自然科学分野を担当している。さらにナショナルライセンスを国同士に拡大する **Knowledge Exchange** がデンマーク、英国、オランダ、ドイツ間で 2009-2011 について合意したばかりという話題も提供された。

GetInfo は目録検索だけでなく、すべての科学技術情報を提供するのだ、と説明があった。いわゆる次世代 OPAC といえる。図書、雑誌記事、冊子体、電子媒体を同時に検索するのはもちろんのこと、研究データ、映像情報等を検索対象としている。検索方式も、カタログ、主題検索、これらを統合した検索、さらに化学物質情報など外部データベースを検索する拡張サービスが用意されている。検索結果は関連度の高さ順に表示され、結果の再検索(著者名、ドキュメントタイプ、出版年、出版社など)も行えるようになっている。もちろん、検索した文献の入手も契約データの閲覧、Pay-Per-View、ILL 申込へのリンクが用意されている。また、**GetInfo** の検索対象として地図や建物の情報など 3 次元データを取り込もうとするプロジェクト **PROBADO** の発表もあった。

バイエルン州立図書館 (ミュンヘン)

1558 年に設立されたバイエルン宮廷図書館に起源を持つバイエルン州立図書館 (以下 BSB) は、プロイセン文化財団ベルリン国立図書館と共に、ドイツ国立図書館とは別組織ながら国立図書館としての機能を持つ図書館に位置付けられている。ドイツでは、ドイチェ・ビューヘライ設立の 1912 年以前出版資料の年代別分担収集が行われており、BSB は最も古い 1450~1600 年に出版された資料を担っている。

収集された資料は保存と利用のためデジタル化センターで電子化される。1997 年から 100 以上のプロジェクトが展開されてきたが、現在は 6~16 世紀の手稿と初期刊本の電子化、Google Book と共同事業で行っている 17-19 世紀資料の電子化、20-21 世紀の現代資料の電子化の 3 つのプロジェクトが行われている。2007 年 2 月に締結された Google の事業は館外で行われている。館内のデジタル化センターでは残り 2 つの作業が行われているのを見学した。初期刊本の電子化は 1 ページずつ慎重にスキャンされているのに比べ、現代資料は 3 秒で 2 ページのスキャンができるスキャンロボット (図 1) を用いて行われていた。現代資料の電子化は全文のインデックス化が目的なので電子化されたデータの品質は初期刊本のようにには問題にしないとのことだった。

電子化した資料の OCR の品質改善プロジェクト **IMPACT**、リンクリゾルバを用いた OPAC での提供方法も興味深いものだった。

BSB は一方で、55,000 種の現在刊行中の雑誌を契約しており、これは大英図書館につぐ世界第 2 位の規模となっている。このうち 13,500 が電子ジャーナルの契約である。これらの電子ジャーナルや、データベース、電子ブックの契約のため **ZEM** と呼ばれるバイエルン州のコンソーシアムの活動紹介も興味深かった。フルテキストが利用できる電子ジャーナルは OPAC でも検索できる。それ以外は電子ジャーナルリスト **EZB** (Electronic

Journals Library) で提供されている。EZB はレーゲンスブルク大学が 1997 年に開発したものだが、現在はドイツ国内の 400 以上の研究機関が利用している。ナショナルライセンスの電子ジャーナルも加えた掲載ジャーナル数は 46,000 以上になる。参加館の利用条件が信号機のように赤・黄・緑で表示され、利用者にわかりやすく工夫されている。



図 1) スキャンロボット

マックス・プランク・デジタル図書館 (ミュンヘン)

マックス・プランク研究所はドイツ国内に 3 分野 78 の機関を持つドイツ最大の研究機関である。研究所全体で 71 の図書館がある。マックス・プランク・デジタル図書館 (以下 MPDL) は、起源は 70 年代に遡るものの、MPDL としては 2007 年から活動している。

MPDL では IR のために開発されたオープンソースシステム **eSciDOC** とそれをめぐるプロジェクトの紹介があった。eSciDOC は研究成果のデータの形態にとらわれずに、すべてを登録できるオープンソースのシステムである。MPDL と FIZ カールスルーエが開発した。論文を登録するための **Pubman**、イメージデータを登録するための **Faces**、神聖ローマ帝国の法律書のデータベースをモデルにしたスキャンデータの提供法を検討する **ViRR** などが紹介された。eSciDOC は研修旅行にも参加した物質・材料研究機構が、すでに MPDL と共同研究を行っている。日本語インターフェイスの紹介な

ど身近な話題として捉えることができた。

また、電子ジャーナルの、ニーズ、費用、利用率を収集に反映するための、電子リソースの利用率を利用した電子資源評価の試みも紹介された。その成果を出版社との交渉に活かせるようになればよい、とのことだった。

電子図書館といえば、古い資料をスキャンングすることや、電子ジャーナルリストを構築することのイメージがあった。

しかし、今回、ドイツの図書館の取り組みを直接担当者から伺うことで、このイメージは改められた。資料の電子化(CONTENTUS、DDB、PROBADO、BSB)、資料の媒体を問わないハイブリットな提供方法(GetInfo、GOPRTIS、VASCODA)、データの長期保存(nestor、PARSEInsight)、IR・OAへの取り組み(ゲッティンゲン大学図書館、SCOAP³、GMS、eSciDOC)など、総合的に検討する重要性を再認識した。

周知のように2011年には私たちの図書館は100周年を迎える。より多くの学術情報が電子化されるだろう次の100年に向けて、考慮すべき課題を考える大変有意義な1週間であった。

最後に、1週間の研修旅行への参加に際し、ご理解・ご協力・ご支援くださったドイツ文化センター、同センター図書館長クリステル・マーンケ氏、同行のみなさん、野家館長、片山部長ほか図書館のみなさん、そして家族に感謝の意を表し稿を閉じたい。

(わたなべ・あいこ)



参加者全員で(筆者前列右端)

参考文献

- 1) 『ドイツにおける学術情報流通：分散とネットワーク』 酒井由紀子、クリステル・マーンケ編. 日本図書館協会, 2008. 9.

参照サイト：URL 確認 2010. 1. 12

・ドイツ国立図書館

Deutsche National Bibliothek

<http://www.d-nb.de/eng/index.htm>

・ゲッティンゲン大学図書館

**Niedersächsische Staats- und
Universitätsbibliothek Göttingen**

<http://www.sub.uni-goettingen.de/index-e.html>

・技術情報図書館

**Technische Informationsbibliothek -
Universitätsbibliothek Hannover**

<http://www.tib-hannover.de/en/>

・バイエルン州立図書館

Bayerische StaatsBibliothek

<http://www.bsb-muenchen.de/index.php?L=3>

・マックス・プランク・デジタル図書館

Max Planck digital library

<http://www.mpdl.mpg.de/>

平成 21 年度大学図書館職員短期研修 参加報告

工学分館管理係 柳 原 幸 子

このたび、国立情報学研究所主催の大学図書館職員短期研修に参加させていただいた。研修の4日間は、公私共に充実しており、今までで最も印象深いものとなった。その濃密な期間のすべてを記すことは難しいため、ここでは主に研修内容と受講者の様子について報告したい。初めにこの研修の概要について記す。

- 時期：10月27日～10月30日の4日間
- 場所：東京会場（東京大学本郷キャンパスの附属図書館本館）
- 参加資格：勤務年数2年以上10年以下で、35歳以下の大学図書館員
- 参加者：46名（東北大学からは私を含め3名が参加した）

今回の研修は、何よりも全体の構成がすばらしいと感じた。内容は、大きく分けて講義とグループ討議の2つであった。講義は、いわゆる座学であり、グループ討議は、グループに分かれて与えられた課題を検討するものである。まず、講義について述べたい。プログラムは、1講義90分×3講義×4日間と盛りだくさんでありながら、それぞれが1日ごとに関連した内容でまとまっていた。そのため理解しやすく、記憶に留めやすかった。また、講義を全て聞き終えると、今図書館員として必要なアンテナが得られるように、内容の全体的なバランスも考えられているようだった。講師は、その道の最前線で活躍されている方々であり、ご自身の経験を元にお話して下さったので、大変聞きやすく面白かった。レジュメには各講師のメールアドレスが載せられており、研修後も質問ができるよう、細かい配慮がされていた。

次にグループ討議について述べたい。これは、事前に提示される3つの課題について、参加者の希望をもとにグループ分けを行い、決められ

た時間内で検討するものである。今年の課題は、①“どこでもネット時代”の新しいオンラインサービス、②図書館のコマーシャルを考える（作る）、③「利用倍増計画」を考える、といずれも実践的で取り組みがいのあるものだったが、それだけに討議が形となるのか、私は不安であった。研修の最終日には、全員の前でパワーポイントを使ったプレゼンテーションもしなければならない。さらに、参加前に仕入れた“うわさ”によれば、そのプレゼンは単なる発表ではなく、何かパフォーマンスなどのひねり（？）が必要だと言う。4日間、初めて顔をあわせる人達と、難しい課題に取り組み、時間内で発表の形にして、笑いも取れ、ということらしい。なんという無茶振りか。グループ討議は、参加前の私にとって一番の心配事だった。

しかし、実際にグループ討議が始まった2日目に、不安は一掃された。おそらく主催者側で、グループ内の人の配置からグループ間のバランスまで、かなり考慮されていたのだろう。あらかじめ、各グループに決められていた司会と書記は、まるで経歴調査をしたかのように適任だった。検討はスムーズに進行し、時間内で終わられた。また、参加資格範囲の勤務年数2年目と10年目とでは、経験の差も大きいはずだが、グループ間のバランスは均衡しており、いずれのグループの発表も面白く、笑い、多くの知見やアイディアをもたらしてくれた。

このように、研修の方法、講義の組み方、グループのパワーバランスと、プログラムの全てが考え抜かれていたため、受講者は毎日安心して講義をうけ、楽しく討議を行うことができたのだと思う。業務を抱えながら、忙しい中、研修を綿密に考えてくださったスタッフの方々に、心から感謝している。

次に、受講者について。グループ討議では、参加者の多くが初対面ながら、司会と書記を中心に、各自がお互いを尊重しつつ、討議し協力しあえた。最終日の発表でも、どのグループも誰か1人が発表するのではなく、グループ内で分担したり、グループ全員で行うパフォーマンスを取り入れたりしていた。会場の雰囲気は、常に応援ムードに包まれており、発表者の緊張感をやわらげてくれた。

不思議なことだが、3つの課題は内容が異なっていたにもかかわらず、どのグループの発表にも、結論や提案に、これからの図書館は他部署ともっと連携して対処しよう、という意識がうかがえた。協力、連携する大切さ、その認識を参加者間で共有できたことで、同志や仲間のような心強い一体感を得られた。

また、主催者によると、今回の研修は、私立大学から参加された方が多いという特徴があったそうだ。そのため、随所で国立大学とは異なる、柔軟で積極的な取り組みをうかがうことができた。同時に、私立大学の方の研修に対するより高い目的意識と姿勢から、刺激をうけた。多くの私立大学では、職場の人数が極端に少ないことから、望んだ研修を受けられることは、大変貴重なことなのだという。話をきき、気が引き締まった。これまであまり知ることができなかった私立大学の様子を、偶然とはいえ直接聞くことができて大変よかったと思う。

偶然といえば、今回の研修に、東北大学から私の他に先輩が2名参加していたことも幸運なことだった。先輩方は初日から各講義が終了する度に盛んに質問し、懇親会では司会も立派に務められ、大活躍だった。同じ大学から参加している人がいると心強く、安心して研修に臨める上に、講義では上記のような活躍ぶり「東北大学の3人目」の私としては、ちょっと鼻が高かった。これらの受講者の印象は、研修という偶然の出会いにより得られたものだ。その偶然をそれぞれが活かし、協力し合えたことで、一層思い出深い研修になったのだと思う。

今回の研修では、自分が所属する職場環境のよさを認識することも多かった。1つは、附属図書館全体の良さであり、部長、課長をはじめ、上司の方々が研修参加を促し、職場の皆さんも受講を後押しして下さっていることである。これは研修に行くたびに感じている。もう1つは、身近な職場環境の良さである。私の所属する工学分館では、普段から、課題や問題の情報共有と、それに対する自由闊達な意見交換が行われている。先のグループ討議は、この工学分館の雰囲気にとってもよく似ていたし、グループ討議のブレインストーミングは、職場の理工系情報教育支援ワーキンググループの様相に似ていた。そのため、緊張しやすい私も、物怖じすることなく、討議に積極的に関わることができた。自分から参加している意識も高まり、より充実感・達成感を得られたと思う。これは、いつも活発な意見交換の場を作ってくさっている工学分館、理工系情報教育支援のメンバーと、その活動を認めて支えてくださっている北青葉山分館の皆さんのおかげである。

短期研修が終わってはや2ヶ月、今当時を振り返ってみても、この4日間は私に鮮烈な印象を残している。その要因を探ると、主催者が研修を緻密に考えて、受講者が少しでも理解しやすいように、楽しめるように色々な点で配慮して下さっていたこと。それにより参加者に一体感が生まれたこと。普段から職場で意見を言いやすい雰囲気と機会が設けられており、それによって討議に積極的に参加できたこと。なにより快く研修への参加を促し、支えて下さった方々が沢山いたおかげである。今後は、研修受講者、同僚の研修参加を応援する職場でのサポート役、はたまた研修のスタッフになることもあるだろう。それぞれの役割において、今回の経験をいかしていきたいと思う。良い機会を与えていただき、ありがとうございました。

(やなぎはら・さちこ)

「平成 21 年度 フレッシュ・パーソン・セミナー」を受講して

農学分館図書係 加 藤 亜 紀

2009 年 11 月 13 日、東北地区大学図書館協議会主催によるフレッシュ・パーソン・セミナーが本学附属図書館を会場に開催されました。図書館勤務年数が概ね 2 年以内の職員を対象とした本セミナーは、平成 17 年度より隔年で開催されており、第 3 回目となる今年も国公立・私立を問わず東北各地の大学図書館から 31 名の参加者が集まりました。

午前は、まず大学図書館の役割と課題について大学図書館基準に沿って講義していただきました。大学という組織の中で図書館が果たすべき役割や、大学と図書館を取り巻く環境の変化とその課題について明確に示していただき、図書館が抱える問題について改めて学ぶことができました。続くカウンター業務についての講義では、カウンターに立つ前の心構えやレファレンスの基礎について、実体験に基づき具体的にお話していただきました。普段閲覧業務を担当している私にとって、早速見習わなければならないことばかりでした。特に、「図書館での利用者の成功体験をつくる」というお話には非常に感銘を受けました。

昼食時には懇親昼食会が開かれ、4 つのグループに分かれて楽しく会話を交わしながら食事をしました。5 月に開催された目録講習会にも参加されていた方が多く、久しぶりの再会を喜びお互いの近況を報告しあう姿も見られました。

午後は、初めに目録データの作成と ILL による資料の活用についての講義があり、「図書目録」「雑誌目録」「ILL」について、それぞれの業務の流れを非常に分かりやすく説明していただきました。私は目録と ILL 業務にはほとんど関わっていないのですが、今回の講義を聞き、これらの業務と自分の業務の関係や、図書館業務全体の関連性を実感することができました。

続く講義では、東北福祉大学における雑誌業務の実態についてお話していただきました。特定の図書館の例ではありましたが、1 日、1 ヶ月、1 年という期間における業務の流れをそれぞれ示していただき、なんとなく日々の業務をこなしていくのではなく、長期的な視野を持って計画的に業務に当たる重要性を感じました。

講義終了後には、「学生にもっと図書館を利用してもらうために、私たち図書館員は今何をすべきか」というテーマで、班別討議が行われました。電子ジャーナルやインターネットの普及で利用者は図書館に来なくなるといわれている中、なんとかしてもっと図書館を利用して欲しいという参加者の熱意が感じられる討議となりました。難しいテーマでもあり、ありきたりな方策しか提示できませんでしたが、各大学での取り組みやキャリアの異なる参加者の様々な意見を聞くことができ、とても参考になりました。

また、今回のセミナーを通して、コミュニケーションの大切さについても再確認できました。各職場では「利用者のために」という共通意識のもと、日々の業務を連携して行っていくべきなのは言うまでもありませんが、学内の他部署・他大学の方たちと円滑なコミュニケーションを図ることもまた重要だと教えていただきました。どうしてもパソコンに向かって仕事をする時間が多く自分一人の中で仕事が完結しているように思ってしまうがちですが、多くの利用者や教職員、学内外の図書館員たちとのつながりを常に意識しながら業務に臨まなければと痛感しました。

最後になりましたが、講師の方々および受講の機会を与えてくださった関係者の皆様に心から御礼を申し上げます。ありがとうございました。
(かとう・あき)

平成 21 年度東北大学附属図書館企画展

「江戸のサイエンス ～あたたかな科学が生まれた頃～」開催報告

展示ワーキンググループ

平成 21 年 10 月 23 日(金)から 11 月 24 日(火)までの約 1 ヶ月間、企画展「江戸のサイエンス ～あたたかな科学が生まれた頃～」を、附属図書館本館 1 階展示室で開催しました。

今回は、海を渡ってやってきたサイエンスが、江戸時代に日本の中で、身近な対象に目を向けた素朴で温もりのある「あたたかな科学」として展開していった様子を感じ取れるように、本学が誇る「狩野(亨吉)文庫」を中心とした所蔵資料の中から精選して展示しました。



鎖国体制下、長崎出島を通じて流入した西洋の知識を記録した資料群をプロローグとしました。

第 1 部「楽しみの科学」では、からくり、エレキテル、和時計などが記録された書物により、人々を楽しませ、自然に合わせて人間らしく生活するための科学を示しました。

第 2 部「好奇心の科学」では、天文、地理、薬草から動植物全般を扱う本草学など、当時の日本人の身の回りの自然に対する好奇心、知識欲の証となる書物を集めました。

第 3 部「からだの科学」では、杉田玄白の「解体新書」をはじめとして、西洋医学の知識を得て医療に役立てようとする先人たちの熱意の成果である書物の数々を紹介しました。

最後に年表や科学者の系譜図により、江戸期における科学の展開の様子と、近現代へ受け継がれていく流れを示してエピローグとしました。

また、展示会場の入口前に、からくり模型を動かしたり、江戸時代の折り紙を実際に折ってみたりして楽しむ「体験コーナー」を設け、親子で長時間挑戦している姿も見受けられました。

会期中には、展示テーマに関する記念講演会を 2 回開催しました。

10 月 26 日(月)、「科学の劇場 ～科学と見世物の間～」と題し、本学名誉教授の吉田忠氏から、解剖や科学実験が見世物として人々の関心を集めていた様子などを、多数の図や写真とともにわかりやすくお話いただきました。

また、11 月 8 日(日)には仙台郷土研究会理事の黒須潔氏を迎え、「仙台藩の天文史 ～戸板保祐と幻の西洋暦～」と題して、仙台藩の天文学者・数学者として知られる戸板保祐の人生を軸に、仙台藩の天文事情から、幕府による暦の改定の話、観測を重んじた戸板の現代科学に通じる学問観など、幅広くお話いただきました。



一般市民や研究者・学生など、通算 100 名を超える参加者がメモを取りながら熱心に聴き入っていました。

展示会場には会期中 1,000 名を超える来場者

があり、「このように何かしら私達を感化してくれるような展示を今後も期待したい。」「貴重な資料が無料で公開され、いつまでも見ていたい展示だった。」などの感想が寄せられ、好評のうちに終了しました。

図書館職員によるワーキンググループが中心となりテーマ設定から選書・解説、展示作業ま

で行いましたが、開催に当たりましては、学内外の関係各位に多大なご支援を賜りました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。また、会場に足を運んでくださった皆様、ありがとうございました。今後も本学の豊富な蔵書をもとに、魅力的な展示を企画していきますので、ご期待ください。

附属図書館企画展「江戸のサイエンス～あたたかな科学が生まれた頃～」

第1部 楽しみの科学ー科学を楽しんでいた江戸時代ー

工学分館管理係 永 井 伸

1. はじめに

平成21年度の附属図書館企画展は、「江戸のサイエンス～あたたかな科学が生まれた頃～」をテーマに開催しました。この展示会では、江戸時代の科学の内容、そして江戸時代の人々の科学に対する態度を図書館の所蔵資料を通じて紹介しました。それらは決して過去のものではなく、現代に生きる私たちにとって参考になるところが多くあります。展示は3部構成で行いましたが、ここでは第1部について、その内容を紹介します。

第1部のテーマは「楽しみの科学」です。からくりやエレキテルに関する資料からは、江戸時代において、科学が人々の楽しみのために使われていたことが読み取れます。また、昼夜の長さの変化に応じて一刻の長さが変化する「不定時法」と呼ばれる時刻法に合わせて動く「和時計」を、様々な技術的な工夫を凝らして製作していたことから、あくまで人間にとって暮らしやすいリズムを尊重していたことが伺われます。いずれの例から、科学が効率を良くするために使われたり、人間が機械に操られるようなことが、江戸時代にはなかったように感じられます。

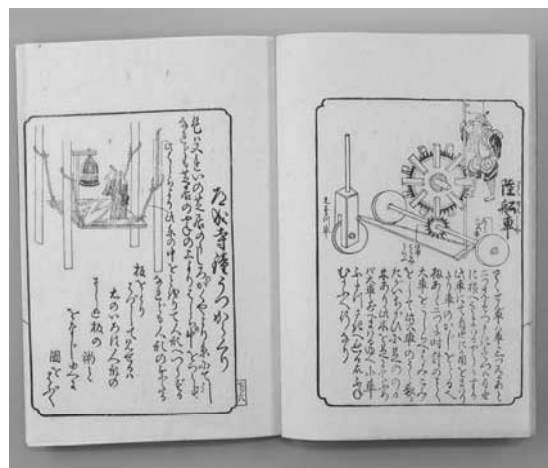
以下では、からくり、エレキテル、和時計の順に、展示資料のうちいくつかを紹介します。

2. 展示資料

(1) からくり

江戸時代には、からくりを用いた興行が行われ、人々の関心を集めました。

「機訓蒙鑑草」は、享保15年(1730)に刊行された書です。文字を書く人形のからくりや、1日に40里ほどを走るといふ「陸船車」など当時もてはやされたからくりが、絵入りで紹介されています。内部の仕掛けの解説もされていますが、てこや滑車を利用した糸からくりなどのほか、奇術に類するものも含まれています。



陸船車(右)「拾珍御伽機訓蒙鑑草(複製)」

人々の好奇心をそそるものではあったものの、その仕組みはまだ科学と言えるほどのものではなかったようです。

江戸時代に見世物用のからくり芝居で一世を風靡したのが竹田からくりです。竹田からくりは竹田近江に始まり以降4代にわたり引き継がれたからくり芝居です。「摂津名所図会」によると、寛文2年(1662)に、道頓堀で初めてからくり芝居を興行したとされています。

宝暦8年(1758)に刊行された「大からくり絵尽」には、竹田からくりの演目が紹介されています。この書を見ると「竹田からくり」がどんな出し物を興行していたかが良く分かります。



三絃二挺鼓「大からくり絵尽（複製）」

寛政8年(1796)には、「機巧図彙」が刊行されました。著者は細川頼直で、時計と機械仕掛けの玩具を取り扱っています。首巻では、からくりで用いる機械仕掛けの基本となる、掛時計、櫓時計、枕時計、尺時計などの時計について記載しています。その後、上巻には茶運人形、台上の人形が後ろ向きに空中回転して何段もトンボ返りする五段返、連理返、下巻には竜門滝、鼓笛児童、闘鶏、魚釣人形など、上下巻合わせて9種の自動人形が掲載されています。

この書の特徴は何といっても材料や部品の寸法、動きの仕組みなど、製作のための情報が図を交えて詳しく記載されていることです。奥義は秘伝とされていた江戸時代に、製作法の詳細

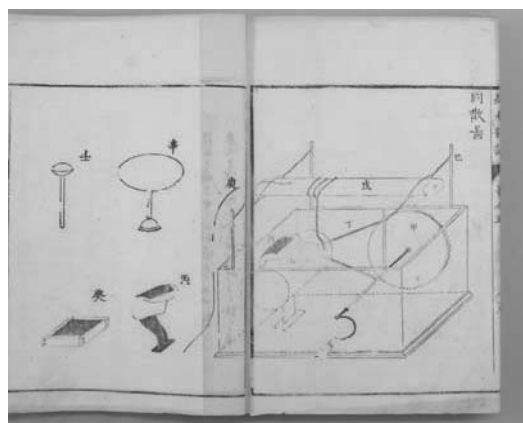
を公に発表したのは珍しいことでした。



茶運人形「機巧図彙」

(2) エレキテル

エレキテルは、発電体の摩擦により静電気を発生させる起電機のことです。名前は、オランダ語で電気を意味するエレクトリシテイト (Elektricitet) に由来しています。エレキテルが我が国の文献にはじめて現れるのは、後藤梨春が明和2年(1765)に著した「紅毛談」で、この書では、病人の体から火を取って治療する治療器具として扱われています。「解体新書」の訳述で有名な桂川甫周の弟、森島中良が著した「紅毛雑話」の中では、エレキテルの構造について初めて正確な解説がなされました。

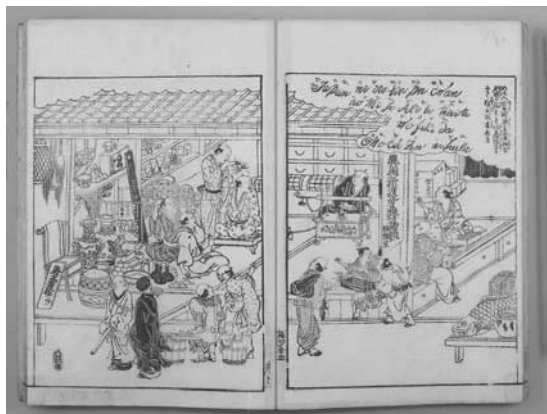


エレキテルの構造図「紅毛雑話」

その後、エレキテルは見世物の道具としてもてはやされるようになりました。「摂津名所図会」には、大坂伏見町の疋田屋で、エレキテル

を陳列販売しているところが描かれています。

エレキテルを使って人の体から火花が出る放電現象を見て、面白おかしく笑っている人々が印象的です。



エレキテルの陳列販売「撰津名所図会」

一方、橋本曇斎が著した「阿蘭陀始制エレキテル究理原」には、手をつないだ人々にエレキテルを使って電気を通して驚かせる「百人おびえ」と呼ばれる実験のほか、「蛙やねずみ、すずめ等を気絶させる実験」、「泉州熊取谷で天の火をとる実験」といった様々な実験が掲載されています。このことから、橋本曇斎は我が国電気実験の祖と言われています。しかし、エレキテルのような奇機を使い楽しむことで大いに満足であったのか、ペリー提督が幕府に電信機を献上するまで、日本での電気研究が大きく進展することはありませんでした。

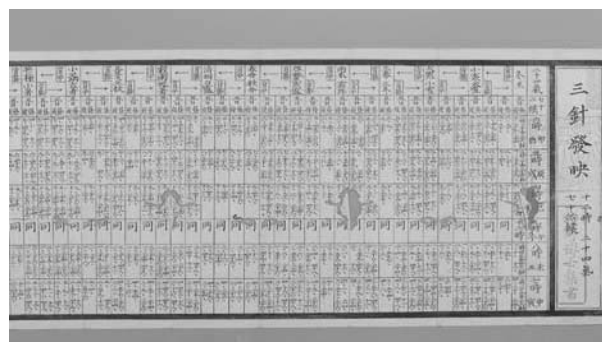


百人おびえの実験

「阿蘭陀始制エレキテル究理原（複製）」

（３）和時計

江戸時代には日本では、不定時法が採用されていました。不定時法とは、日の出から日の入りまでを昼、日没から日の出までを夜として、それぞれを6等分して一刻の長さを決めるという時刻法です。現在用いられている定時法では、一刻の長さは1年中2時間に相当しますが、不定時法では、夏の昼の一刻は、冬の昼の一刻よりも長くなります。1日の中でも、昼の一刻と夜の一刻は異なる長さになります。

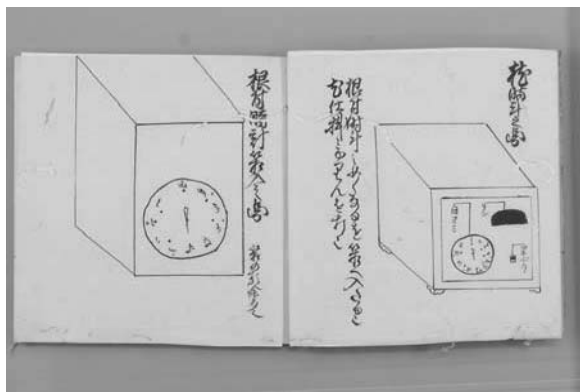


定時法と不定時法の変換早見表「三針發映」

この不定時法に沿って時を刻む時計が「和時計」です。和時計の製作は江戸時代の始め頃、西洋から伝来した時計を模倣することから始められました。例えば、二挺天符といって、昼と夜での運転速度を変えるために、昼間運転用と、夜間運転用の2つの天符（時計の機構の1つ）を取り付けた時計があります。また、運転速度は一定ですが、時刻を書いた文字盤の間隔を調整できる、割駒式の文字盤を用いた和時計もあります。いずれも、不定時法に合わせるための和時計独特の仕掛けです。



和時計の製作方法「時計製作書」



枕時計「時計類品附用法」

資料展示のほか、万年自鳴鐘の製作で知られる田中久重についてもパネル展示を行いました。万年自鳴鐘とは六角形の置時計で、六面にはそれぞれ西洋時計、和時計、二十四節、七曜表などが配置され、自動的に連動して運転するという時計です。

このように和時計は機構に独創的な工夫を加えたものであったほか、優れた意匠を凝らしたものが多く、工芸品としても素晴らしいものでした。

(4) その他

以上に示した資料のほかにも、東北大学附属図書館所蔵の関連資料を展示しました。また学研「大人の科学」から出ているエレキテルや茶運人形の模型を展示しました。

3. おわりに

以上、第1部の展示資料について紹介しました。今回の展示にあたり様々な資料を調べてみると、江戸時代の人々は直感的に、科学に対する理想的な態度を身につけていたのではないかと感じられる部分が随所にありました。今日では、携帯端末やパソコンの発達などの科学技術の進歩が、逆に人間にとってストレスとなってしまうこともあります。そんな私達に、江戸時代の人々は資料を通じて、科学とどのような態

度で接するのが良いかという手本を与えてくれていると思います。

本稿で紹介した資料を含め、東北大学附属図書館では貴重な資料を数多く所蔵しています。お問い合わせいただければ、来館してご覧頂くことも可能です。ぜひ資料を活用し、皆さんそれぞれの新たな発見をしていただければ幸いです。
(ながい・しん)

参考文献

- 吉田光邦「ものと人間の文化史 13・機械」法政大学出版局 1974
立川昭二「ものと人間の文化史 3・からくり」法政大学出版局 1969
菊池俊彦「図譜江戸時代の技術上・下」恒和出版 1988
塚田泰三郎「和時計」東峰書院 1960
青木国夫ほか編「エレキテル全書・阿蘭陀始制エレキテル究理原・遠西奇器述・和蘭奇器」(江戸科学古典叢書 11) 恒和出版 1978
若井登、井上恵子「ゑれきてる」考証 郵政研究所月報 2002 no. 163、p. 32-35
青木国夫ほか編「内服同功・済生備考」(江戸科学古典叢書 29) 恒和出版 1980
森修編「日本名所風俗図会 10 大阪の巻」角川書店 1980
有澤隆「図説時計の歴史」河出書房新社 2006
三枝博音編「復刻日本科学古典全書 2 理学」朝日新聞社 1978
青木国夫ほか編「機訓蒙鑑草三巻・機巧図彙三巻」(江戸科学古典叢書 3) 恒和出版 1976

会 議

第 83 次国立七大学附属図書館協議会について

第 83 次国立七大学附属図書館協議会が 10 月 23 日本学を会場として開催されました。

この会議は、年 1 回各大学が持ち回りで開催しているものであり、今年は本学が当番大学となり開催されたものです。

法人化に伴い各大学が抱える問題、七大学に共通する問題等について活発な意見交換が行われました。

また、会議には文部科学省及び国立情報学研究所からも出席いただき図書館を取り巻く近況等について講演が行われました。

21.12.2 平成 21 年度第 6 回附属図書館運営会議

■協議事項

1. 平成 21 年度時間外開館経費について
2. 第二期中期目標・中期計画について
3. 平成 21 年度第 2 回総長裁量経費について
4. 平成 21 年度国際化拠点整備事業（グローバル 30）に係る公募について

■報告事項

1. 第 83 次国立七大学附属図書館協議会について
2. 国立大学図書館協議会秋期理事会について
3. 第 64 回東北地区大学図書館協議会総会について
4. 平成 21 年度部局評価について
5. 東北大学機関リポジトリへの学位論文登録について
6. 目録の遡及入力について
7. 本館の開館時間延長と利用状況について
8. 平成 21 年度東北大学附属図書館企画展「江戸のサイエンス」について
9. 全学授業「大学生のための情報検索術」について

21.12. 8 平成 21 年度第 5 回附属図書館商議会

■協議事項

1. 平成 21 年度時間外開館経費について
2. 第二期中期目標・中期計画について
3. 平成 21 年度第 2 回総長裁量経費について
4. 平成 21 年度国際化拠点整備事業（グローバル 30）に係る公募について

■報告事項

1. 第 83 次国立七大学附属図書館協議会について
2. 国立大学図書館協議会秋期理事会について
3. 第 64 回東北地区大学図書館協議会総会について
4. 平成 21 年度部局評価について
5. 東北大学機関リポジトリへの学位論文登録について
6. 目録の遡及入力について
7. 本館の開館時間延長と利用状況について
8. 平成 21 年度東北大学附属図書館企画展「江戸のサイエンス」について
9. 全学授業「大学生のための情報検索術」について
10. エルゼビア社電子ジャーナル経費の振替について

人 事 異 動

平成 21 年 12 月 31 日現在

発令年月日	新 職	氏 名	旧 職	備 考
21. 9. 30	附属図書館副館長	倉本 義夫	附属図書館副館長	期間満了
10. 1		柳澤 輝行		併 任
10. 24		鈴木 悦子	事務補佐員(北青葉山分館整理・運用係)	期間満了
10. 26	事務補佐員(金属材料研究所図書係)	駒込 有紀子		採 用
10. 31		小川 裕子	事務補佐員(金属材料研究所図書係)	辞 職
11. 1	事務補佐員(北青葉山分館整理・運用係)	米川 なつき		採 用
12. 17		横田 靖子	事務補佐員(情報サービス課相互利用係)	期間満了

編 集 後 記

今年もまた冬の季節が巡って来ました。ふと気づくと、毎年夏には「夏ってこんなに暑かったかな?」と思い、冬には「冬ってこんなに寒かったかな?」と思っている自分がいます。

去年は雪が少なかったとか、今年は雪が多かったといったことはある程度覚えているのに、気温のことはなかなか記憶に残りにくいと思いませんか?

それは、急に冷え込むとすごく寒く感じるのに、寒い日が続くとそれほど寒く感じなくなるような、人間の気温への適応しやすさから来るのかもしれませんが。あるいは、単純に気温が目に見えないものだからなのかもしれません。

そんなことを不思議に思いながら、きっと次の冬が来た時も、今の寒さを忘れてしまってい

るのでしょう。

ところで、いつも変わらないように見える木這子も、少しずつですが見えないところで変わりつつあります。(実は今年は去年とは編集方法が変わっていたりします)

現在は来年度、そしてその後の図書館 100 周年という節目に向けて、企画を練っているところです。みなさんに「木這子ってこんなにすごかったかな?」と少しでも思ってもらえるよう、限られた時間の中で編集員が知恵をしばっています。

四季の移り変わりと共に、木這子の変化も感じていただけると嬉しいです。



東北大学附属図書館報「木這子」第 34 巻第 3 号 (通号 128 号) 発行日 平成 21 年 12 月 31 日

発行人 片山 俊治 広報委員会委員長 加藤 信哉

発行所 東北大学附属図書館 〒980-8576 仙台市青葉区川内 27-1

電話 022-795-5911 FAX 022-795-5909

URL <http://tul.library.tohoku.ac.jp/>